６　県立図書館長中村地平と塩月桃甫

本田　有璃子

【台湾時代：中村地平と塩月赳】

地平と桃甫の関係について説明する。桃甫の息子塩月赳は、台湾の台北高等学校の同級生であった地平に「同人雑誌を一緒にやろう」と声をかけた。

桃甫は自身がかつて文学を志していたこともあり、かねてから「息子に文学をやらせたい」と考え、積極的に赳の支援を行っていた。

一方地平は商家生まれで、小説家になりたいことを親に打ち明けることができず、「塩月に心から羨望を感じたものであった」と述べている。地平と赳は高等学校時代から互いに意識し、共に文学が大好きだったことが分かる。

地平と桃甫の出会いは赳の存在があったからこそなのだ。

【戦後　地平と桃甫の再会】

桃甫は、25年に渡り活動した台湾美術界から、戦後追われるようにして宮崎へ戻って来ることとなった。失意のまま戻ってきた故郷では、思うように絵も売れず、生活は困窮してしまう。

そんな時、当時、図書館長だった地平は、新聞社や出版社から仕事を見つけたり、高鍋高校の講師の仕事を紹介したり、手助けをする。

これはその時のあるエピソードである。

『ある時地平は少しでも経済的な援助が出来ればと、桃甫に高鍋高校の講師を世話するが、通勤事情が最悪で桃甫は学校を勝手に辞めてしまう。頭を下げて頼み込んだ人事であり、地平はその身勝　手さに憤るが、『食えなくても、僕はやっぱり絵が描きたいんだよ。汽車通勤していると、つかれてとても絵を描く気になれないからね。』と言われ、地平は胸を打たれる。（注・1）

【桃甫の地平への影響】

地平は県立図書館の一室に郷土出身の桃甫や瑛九らの絵を飾り、閲覧室をそれぞれに児島虎次郎ルームや塩月桃甫ルームと名付けるなど、図書館長として芸術文化の振興に取り組んでいた。パンツ1枚になって極限まで追い詰めて絵を描いていた桃甫の姿が地平の目にはとても熱く焼き付いていて、桃甫の画家としての情熱に地平は憧れや尊敬、理想を抱いていたのではないか。

1954(昭和29)年、地平の恩師である桃甫は亡くなる。その死により自身の創作への熱い思いが込み上げ、何作もの作品を書いた。その一つが「告別式前後」であり、地平は桃甫との交流、桃甫への思い、桃甫の息子赳について著している。

地平は心から桃甫のことを尊敬していた。桃甫も地平の支え無しでは、芸術家としてここまで作品を描き続けることは出来なかっただろう。地平の桃甫への思い入れが彼を救ったのではないか。

引用文献

１.岡林稔著『《南方文学》その光と影　中村地平試論』 鉱脈社，2002．p. 279-280

参考文献
岡林稔著『《南方文学》その光と影ー中村地平試論ー』，鉱脈社，　2002，　p.313
中村地平著「告別式前後」
宮崎県立図書館編「緑陰通信」第101号